

# 中華人民共和国国歌の成立過程研究

岡崎 雄兒

## 一、はじめに

中華人民共和国の国歌は「義勇軍行進曲」といい、もとは映画の主題歌であった。作詞は著名な劇作家の田漢<sup>1)</sup>、作曲は数々の優れた歌曲を残し、若くして日本で客死した聶耳<sup>2)</sup>による。映画主題歌が国歌になったのは世界でもまれなことであろう。映画は、一九三〇年代半ばの日本との戦いに立ち上がる青年たちを描いており、主題歌は、映画が上映される前にレコード化され日本軍に抵抗する民衆や戦場に赴く兵士たちに歌われ、彼らを大いに鼓舞激励したという。

では、この映画主題歌はどのようにして生まれ、どのような経過で国歌に選ばれたのだろうか。わが国ではこれまで隣国の国歌の成立過程についてほとんど知られておらず、世界の国歌を紹介した書籍は数多いが、中国国歌の部分を見ると残念ながら間違いや不正確な記述が多い。

たとえば、所功著『国旗・国歌の常識』<sup>3)</sup>では、中国国歌は映画の主題歌であったと述べたあと、「歌詞もリズムも激しいので一九七八年、新しく毛沢東を讃える歌詞に改められたが、毛の死後、もとの歌詞に戻された」と記している。後述するように、歌詞やリズムが激しいから改められたのではなく、作詞者が文化大革命で批判されたからである。

また、情報センター出版局編『写真集国歌』<sup>4)</sup>では、文化大革命時に一時的に使用された歌詞がそのまま紹介されてい

る。高田三九三編著『世界の国歌全集』<sup>⑤</sup>では、「この歌は一九三二年に書かれ、一九四九年九月二十七日正式に国歌として制定された」と書かれている。しかし、書かれたのは三二年でなく三五年。四九年九月二十七日に正式に国歌として制定されたのでなく暫定的に決められたものであつた。編著者の訳詞が付けられているが、これも不正確である。もつとも正確なのが、美山書房編著『世界の国歌』<sup>⑥</sup>である。だが、本書も「一九八二年に正式に国歌に定められた」と記されているが、その年は一時的に変えられていた歌詞がもとに戻されたのであり、正式に国歌として承認されたのは七八年、すなわち歌詞が変えられた年である。類書の中でもつとも大部な藤沢優編『世界の国旗・国歌総覧』<sup>⑦</sup>は、刊行準備時が中国の文化大革命の最中であつたため曲のみを紹介して歌詞は載せていない。

本稿では、映画主題歌としての『義勇軍行進曲』の誕生経緯と中華人民共和国成立時に暫定国歌に指定され、後に正式指定に至つた経緯について考察するとともに、抗日戦争を背景に生まれた国歌の今後についてもふれてみた。

## 二、国歌とはなにか

中国国歌の成立過程に入る前に国歌とはなにかを考えてみたい。『大百科事典』(平凡社刊)をみると、「国歌は十九世紀以降の近代国家の成立に伴い、国際的行事における使用の要請から作られたものがほとんどである。したがって、国歌の第一の機能は、他国に対して自国の独立性を示すことであり、第二の機能は一つの国の内部的結束を強化することである」と記している。

現在世界で独立国として認められている国はおよそ百九十あり、そのほとんどが国歌をもっている。所功氏はその著書『国歌・国旗の常識』<sup>⑧</sup>で、国歌の特徴を歌詞の内容から判断し、次の四グループに分類している。

- (一) カミヤ君主を讃える国歌
- (二) 歴史や風土を讃える国歌
- (三) 祖国の独立を讃える国歌
- (四) 社会の革命を讃える国歌

中国の国歌はもちろん(四)の「社会の革命を讃える国歌」である。この分野でもっとも有名なのは、言うまでもなくフランス国歌『ラ・マルセイエーズ』である。この歌はフランス革命最中の一七九二年四月、フランス東部の都市、ストラスブールで工兵大尉ルジェ・ド・リールによって作られた『ライン軍のための軍歌』であった。これが瞬く間に口伝えで広まりテュイルリー宮殿攻撃で名を馳せたマルセイユに集まった義勇兵が歌い続けたことで『ラ・マルセイエーズ』と呼ばれるようになった。

『義勇軍行進曲』の作曲者聶耳も、『ラ・マルセイエーズ』に親近感を寄せ、いつかは中国の『ラ・マルセイエーズ』を作りたいと友人に語っていた。<sup>9)</sup>

曲はともに行進曲らしく軽快なリズム感に溢れており、歌詞も冒頭部分で自分たちの置かれている危機的状況を説明、後半はそれに抗し立ち上がり進もうと呼びかけている。

#### 『義勇軍行進曲』

起て！ 奴隸となることを望まぬ人びとよ！

我らが血肉で築こう新たな長城を！

中華民族に最大の危機せまる

一人びとりが最後の雄叫びをあげる時だ  
起て！ 起て！ 起て！  
もろびと心を一つに、  
敵の砲火をついて進め！  
敵の砲火をついて進め！  
進め！ 進め！ 進め！

(中華人民共和国駐日大使館ホームページ [www.china-embassy.or.jp](http://www.china-embassy.or.jp)より)

『ラ・マルセイエーズ』

いざ祖国の子らよ

栄光の日は来たれり、

我らに向かつて圧政の

血塗られし軍旗は掲げられたり、(この行のみ繰り返し)

聞こえるか、戦場で、

あの獐猛な兵士どもが唸るのを

奴らは 我らの腕の中にまで

君らの息子を、妻を、殺しに来る

(以下繰り返し)

武器を取れ、市民諸君！ 隊伍を整えよ

進もう！ 進もう、

不浄なる血が我らの田畑に吸われんことを

吉田 進 訳<sup>①</sup>

聶耳と同時期に東京に滞在し、面識のあつた文学者の林林<sup>①</sup>は、『義勇軍行進曲』は『ラ・マルセイエーズ』より人々に与えた影響は大きく、それは中国大陸のみならず日本との戦いのあるところの海外各地、たとえばルソン島の平原、マレーシアの椰子の林の中などどこでも聞くこと出来た<sup>②</sup>と書いている。

『義勇軍行進曲』が果たして『ラ・マルセイエーズ』を越えたのかどうか、筆者はその甲乙をつけるよりも、二十世紀を迎えた今日、このふたつの国歌が実は同じような課題に逢着していることに興味を覚える。

### 三、新国歌誕生以前の中国国歌

近代国家が成立する以前は国歌がないことは別に不思議でもなかった。国歌の必要性が出てきたのはせいぜい十九世紀の中葉以降である。洋務運動の先駆者でもあつた曾国藩の長男、曾紀澤が清朝から派遣されて一八七八年に英仏を訪問し、その後ロシアの公使を務めた時は、国歌がないので、『普天楽』という昔からある古曲を国歌に見立てて演奏したという。一八九五年に清国陸軍部が成立すると、軍歌が国歌代りに演奏されたりした。また、一八九六年に李鴻章が欧州各国及びロシアを訪問した際には、歓迎儀式で『李中堂楽』という古曲が使われた。歌詞は七言絶句の詞である。もちろんこれらは清朝政府が公式に認めたものではなく、その時々任意に使用されたということである。

中国で初めての国歌は、清朝最後の年、一九一一年十月に制定された。これは『鞏金甌』という歌である。軍人の溥同と嚴復の共同作品で英仏、日本など各国の国歌を参考にしたそうだが、清朝王朝の益々の繁栄を願うというなんとも皮肉なものだった。<sup>13)</sup>

一九二二年、孫文を総統に中華民国の臨時政府が南京に成立するが、臨時政府は沈恩孚作詞、沈彭年作曲の国歌草稿を発表した。いわば国歌のたたき台だ。同年七月、教育部総長の蔡元培と次長の範源廉が教育会議を招集し、国歌をどうするかについて討議し、公募することを決めた。公募の結果、三百余編が寄せられたが満足のいく作品はなかった。そこで翌一三年二月、改めて教育部は当時の有力政治家や文化人に手紙を送り知恵を求めたところ、汪榮宝という政治家が古典『尚書大伝・虞夏伝』の中の『卿雲歌』が良いのではと提案し、国歌とすることに決まった。これは「めでたい雲が光輝き、集まったり、薄らいだりする。日と月がかわるがわる照り映え、新しい朝がやってくる」という詞で、中国古代の伝説の王、舜が群臣とともに太平の気分を楽しんだものと言われている。<sup>14)</sup>

同年四月、国会が開かれ実際にこれを演奏することが必要となった。当時北京に居住していたフランス国籍のベルギー人が『卿雲歌』に曲を付けた。しかしこの国歌が使用された期間は短く、その後、自らが組織した帝政運動で中華帝国皇帝に推挙された袁世凱の時代には、『国楽楽譜』（一九一五年六月、詞は蔭昌、曲は玉露）が国歌になった。

さらに、袁世凱の死後の一九一九年十一月、教育部の中に国歌研究会が設立され国歌についての検討がなされ、その結果、『卿雲歌』の歌詞をそのままにして、曲をドイツ留学帰りの肖友梅に依頼し作品を発表した。しかし、この歌は世に出たものの不評でほとんど使用されなかったという。二年後の一九二二年四月、広州で非常国会が開催され政府の改組が図られて孫文が大総統になった。この南方政府は改めて国歌の制定を企画し、新たに『国歌』（徐謙作詞、劉斐烈作曲）が生まれた。

その後、軍閥政府に対する革命を遂行するため、国民党と共産党の合作が進み、一九二六年に軍隊のために作られた

『国民革命歌』が、広く歌われるようになり実質的に国歌の地位を占めるに至った。この歌は日本に留学したこともある卍廓が作詞した。彼は革命軍の宣伝科長で共産党側の人。歌詞は「打倒列強、打倒列強、除軍閥、除軍閥、国民革命成功、国民革命成功、齊歡唱、齊歡唱」という勇ましいものであった。曲はフランス民謡から借用した。

さらに一九三〇年、『国民党党歌』が暫定国歌に制定された。歌詞は孫文の黄埔軍官学校における学生訓示からとった「三民主義吾党所宗、以建民国」という詞だった。作曲は程懋筠が担当した。一九四三年、国民党政府は大衆の反対にもかかわらずこの国民党党歌を正式に国歌とすることを宣言した。

以上、さまざまな国歌があつたが、本稿テーマの『義勇軍行進曲』は六番目の国歌ということになる。

#### 四、『義勇軍行進曲』の誕生

次に『義勇軍行進曲』が生まれた頃の時代背景をみておきたい。

一九二九年十月に始まつた世界恐慌は、日本経済にも大きな影響を及ぼし、街には三百万もの失業者があふれ、労働争議が頻発した。既成政党はこの事態に有効に対処しえず国民の信頼を失い、かわつて軍部の影響力が強まった。軍部内には、満州（東三省）・内蒙古の全域を植民地化して国内矛盾を外に転化し、対ソピエト戦を準備しようとする「満蒙問題武力解決」の要求が急速に台頭してきた。

関東軍参謀の石原莞爾は、すでに二九年から「関東軍満蒙領有計画」を主張し、三一年五月には、たとえ政府が動かずとも「関東軍の主動的行動により回天の偉業をなしうる」として関東軍の独断的な謀略による武力解決を唱えていた。こうした中で、一九三一年九月十八日、関東軍は奉天（現在の沈陽）郊外柳条湖で鉄道爆破事件を起こし、これを機

に東北地方全域に軍を進め、その要地の大半を占領した。これが満州事変であり、その後上海にも日本人保護を理由に軍を送り、翌三二年一月、上海事変を起こした。

露骨な日本の中国侵略に国民党政府は、「安内攘外」（まず国内の敵を一掃して、のちに外国の侵略を防ぐ）の政策で臨んだ。一方東北地方の人々は抗日義勇軍を組織し、日本との戦いを展開した。全国各界の人々もさまざまなやり方でこの抗日義勇軍を支援した。

中国共産党は武装闘争を指揮する一方、文化面では「左翼作家連盟」と「左翼演劇家連盟」を組織し、映画や演劇を使つて積極的に抗日思想の宣伝をするよう呼びかけた。

「左翼劇作家連盟」の上海党支部書記だった田漢は、抗日救国運動の筆頭作家として大活躍していた。日に日に迫る民族の危機に対し、これまでの忠義物語やメロドラマ、才子佳人を描いた物語では民衆の人気を引き付けられなくなっていた。中国共産党は「映画グループ」を組織し、田漢、夏衍など共産党員が続々と明星、芸華、聯華、電通などの映画会社に入つていった。

映画会社は、戦火による影響で一大マーケットの東北市場を失い、上海の映画館も租界の洋画館は残つたものの大半が焼失するなど打撃を受けた。人々の意識も抗日運動の高揚とともに確実に変化しており、これを受けるように、田漢、夏衍らは抗日救国を宣伝する数多くの映画を創作した。

一九三五年の春、田漢がシナリオを書き、電通によつて撮影に入つたばかりの映画『風雲児女』（嵐の中の若者たち）の主題歌が求められているという話を聞いた聶耳は、兄事していた田漢がすでに逮捕されていたので、彼の仕事を引き継いでいる夏衍を訪ね、作曲の仕事を自分に任せて欲しいと訴え了解された。

聶耳は田漢の書いた主題歌『義勇軍行進曲』の作曲初稿を、わずか二夜のうちに完成させ、引き続いて挿入曲『鉄蹄下的歌女』（戦場の歌姫）を作曲した。



聶耳の作曲初稿に対して、友人たちは有益な意見を提出した。しかし上海の体制側の政治弾圧は日増しに激しくなり、聶耳にも逮捕の危機が迫ってきていた。聶耳は友人たちの意見を細かく吟味する時間がなく、慌ただしく四月十五日に上海から日本郵船の「長崎丸」に乗船し日本に向かった。未完成の楽譜は日本で手を加えるよりほかに方法がなかった。一部の書籍に聶耳が『義勇軍行進曲』を日本で作曲したとあるのは一面正しく、一面不正確だということである。

また、田漢が歌詞をたばこの包みの銀紙の裏に書いたとして、当時彼がおかれていた状況がいかに緊迫したものであったかを伝えるエピソードがある。多くの書籍<sup>15</sup>で紹介されているが、これはどうやら田漢の記憶違いに発端があるようだ。夏衍によると、実際は『義勇軍行進曲』は『風雲儿女』のシナリオ最終ページに書かれていた。また、この歌詞を夏衍が書いた、あるいは夏衍が修正したとする説については、飲み物をこぼして読みにくくなっていたので、夏衍が判読しながら読みやすいよう書き直したため、そのような誤解が生まれたと思われる<sup>16</sup>。

『義勇軍行進曲』は発表後大好評を博するが、聶耳自身はその評価を目の当たりにしていない。東京到着後、彼は東亜学校に入学して日本語学習を始める一方、音楽や演劇の鑑賞に忙しい毎日を通す。六月二日、中国からの留学生たちが開いた会合に招かれた彼は、「最近の中国音楽界の総点検」と題して二時間余に及ぶ講演を行い、自ら作曲した『義勇軍行進曲』、『波止場労働者』、『大路歌』を披露した。一曲歌うたびに参加者の熱烈な拍手で迎えられたという。

では、『義勇軍行進曲』を主題歌とした映画『風雲儿女』（風の中の若者たち）とはどのような映画だったのか、そのあらすじはこうである。

日本軍に支配された東北部から、放浪の末、青年詩人の辛白華とかつて軍隊に入った経験のある大学生梁質夫は上海に流れ着いた。彼らの住む部屋の階下には華北から流れ落ちて来た阿鳳という少女とその母親が住んでいた。放浪の間も自分たちの国と民族のことが頭から離れなかった二人は、彼女たちの貧しい暮らしに同情し、何かと手助けをしていた。ある日、梁が革命に加わった友人を助けた容疑で投獄される。なんとか逃げ延びた辛は、アパートの向かい側に住

む金持ちで離婚した施夫人とある会合で知り合い、芸術を愛好する夫人に誘惑され一緒に暮らし始める。

一方、急病で母を亡くした阿鳳は歌舞団に入って各地を転々とする。やつと釈放された梁は、華北の情勢が風雲急を告げ、敵（日本軍）が華北の長城まで踏み込んできたので、北上してこれを討とうと抗日戦線に加わった。辛の方は、施夫人と避暑に訪れた青島で、偶然にも阿鳳が演じる『鉄蹄下の歌女』（戦場の歌姫）の舞台を見る。辛は愛国心を呼び覚まされたものの、施夫人とも別れがたく悩み続ける。しかし、親友だった梁が勇ましく戦死したとの報に衝撃を受け、自らの自堕落な生活を捨て華北の最前線に向かうのだった。<sup>17</sup>

この映画は作品として厚みに乏しく、監督を務めた許幸之自身、「出来がよくなかった」と認めている。<sup>18</sup>しかし、主題歌の『義勇軍行進曲』が人々の抗日戦への熱い思いを十分に表現していたことから、公開と同時に瞬く間に大流行し、レコードが大量に増版され、映画も人々の記憶に残るものとなった。

映画は、上海一の繁華街、南京路の三筋北側にある北京路に面した金城大劇院で上映された。この劇場は現在も黄浦劇場という名で残っている。

『義勇軍行進曲』は、映画上映の直前にレコード化された。その際楽隊演奏用に編曲したのは上海在住のロシア人作曲家、アルシャローモフであった。これを依頼したのが、後に中国音楽界の重鎮となる賀綠汀だった。しかし出来上がった作品がいい加減だったので自ら手を加えたと書いている。<sup>19</sup>

その後、中華人民共和国成立後の一九五三年から五四年にかけて全国の作曲家を集めて管弦楽による演奏のための楽譜を完成させた。この時指導的な役割を果たしたのが作曲家の李煥之で、後の『義勇軍行進曲』の楽譜に聶耳作曲、李煥之編曲と表記されることもあるのはここに由来している。

## 五、抗日救国合唱運動の高まり

抗日戦争の間に全国で大衆的な愛国合唱運動が広がった。この運動は、一九三一年の九・一八事変（いわゆる満州事変）の後始まった初期準備期、一九三五年七月、聶耳の追悼会から始まった運動形成期、そして一九三七年の七・七事変（蘆溝橋事件）以降の高潮期の三期に分けられる。<sup>20</sup>

一九三一年の「九・一八事変」発生後、全国で抗日の気運が高まり、音楽学校の教師は愛国歌曲を作曲することで運動の要請に応えた。その中で米国の大学から帰り上海国立音楽専科學校で教鞭をとっていた黄自は『抗敵歌』、『旗正飄飄』などを作曲し、人々の団結を促し、救国を求める大衆の気持ちに訴え、都市のみならず農村に至るまで大きな反響を巻き起こした。当時の中国共産党が指導する音楽組織は、こうした運動の中で積極的な役割を果たした。聶耳もまた左翼映画、演劇のためにたくさんのお歌を創作した。作品としては、『義勇軍行進曲』をはじめ『卒業の歌』、『前進の歌』、『自衛歌』など多数あり、「戦闘的な風格と大衆的な形式」で大衆が抗日の戦いに立ち上がるのを鼓舞した。

聶耳の歌曲が広く大衆の気持ちを捉えたのは、彼自身が、上海に出てくる前から故郷の雲南省昆明で学生運動などを通じて大衆がどのような厳しい状況に置かれているのかを知っていたこと、そして働く人々の現場に足を運び彼らの喜びと悲しみ、怒りの気持ちを五線譜に表現していったからである。

作品は、映画、舞台、レコード、放送などの手段を通じて急速に広まり、大衆を組織する役割を果たした。これらの歌曲の宣伝を広めるため、一九三五年のはじめに、「民衆合唱会」と「余暇合唱団」が相次いで成立した。民衆合唱会は上海キリスト教青年会の劉良模が発起したもので、左翼音楽に従事する人たちの支持を得ていた。参加者は上海の愛国青年（店員、職員、教師や大学生、高校生）が主で、一九三六年には会員は一千人を越えた。

余暇合唱団の方は、呂驥、沙梅など上海の左翼演劇、音楽界の人々が中心に組織し、のちに進歩的な教師や学生、職業人にも広がった。彼らは日常的な合唱会以外に、労働者や学生の集まるところに出かけ大衆合唱運動を指導するなど積極的に活動を展開した。

こうした準備期を経て、次の運動形成期に入るわけだが、そのきっかけは聶耳の死だった。聶耳が一九三五年七月十七日、神奈川県藤沢町の鶴沼海岸で水泳中に溺死したとの報が上海に伝わるや、大規模な追悼会が開催され、改めて聶耳の作曲した歌曲が見直され、救国合唱運動が全国に広がっていった。

『義勇軍行進曲』が国内外に大きな影響を及ぼし、後に国歌に選ばれるような榮譽を獲得する上で大きな役割を果たした人物として任光と劉良模の二人を忘れることはできない。

任光は作曲家として『漁光曲』（同名の映画の主題歌）などの優れた作品を残している。彼は上海百代唱片（レコード）会社の音楽部主任を務めていたので、映画『風雲児女』が封切られる前に『義勇軍行進曲』をレコード化した。その後国民党政府の迫害を受けてフランスに渡った。一九三八年七月、同地で華僑合唱団を組織し抗日戦争を戦う中国人民への義捐金募集活動を行い、毎回『義勇軍行進曲』を歌った。一九三八年八月には世界反ファシズム大会に参加した四十二カ国の代表に『義勇軍行進曲』を紹介した。また同年冬、シンガポールに渡った彼はそこでも華僑合唱団を組織し、さらに太平洋戦争、国内戦争を通じ『義勇軍行進曲』の宣伝に努めた。

劉良模は先に記したように上海キリスト教青年会に属する青年で、はじめは民衆合唱会を組織して活動していたが、やはり迫害を受けて米国に逃亡した。『義勇軍行進曲』のレコードを携え渡米した彼は抗日戦争への支援を呼びかけるさまざまな活動の中で、この歌を紹介した。ニューヨークのチャイナタウンでは華僑青年合唱団を組織し彼らに『義勇軍行進曲』を教えた。

著名な黒人歌手ポール・ロブソンは劉良模が歌った『義勇軍行進曲』に感動し、すぐにこの歌をマスターし英語だけ

でなく中国語でも歌った。中国語で歌い録音したレコードは『立ち上がれ!』と題され、以後彼のレパートリー『平和の歌』シリーズに収められた。<sup>22)</sup>

太平洋戦争が始まると東南アジア各国では日本の侵略に対する抵抗運動が巻き起こるが、マレーシアなどでは、この歌の「中華民族に最大の危機せまる」という部分を「マレーシア人民に……」と置き換え歌われた。こうしたこともあって『義勇軍行進曲』はインドでも中国向け放送の前奏曲として使われたほかアメリカ、イギリスなどの放送では頻繁にこの曲が用いられるようになった。一九四四年、アメリカ国務省は、連合国が勝利した際演奏する各国の音楽として、中国については『義勇軍行進曲』とすることを決めた。

さらに、『義勇軍行進曲』がどのように歌われ、日本との戦いに挑む人たちを鼓舞していたのかをいくつかの資料から見よう。

中国革命に共鳴し、多数のルポルタージユを書いたアメリカ人ジャーナリスト、アゲネス・スメドレーは、『中国の歌ごえ』<sup>23)</sup>の中で、西安事変直後の西安においてデモ隊が「東洋鬼を打倒せよ」、「張学良を釈放せよ」のスローガンを叫び、国民党政府により禁止されていた『義勇軍行進曲』の旋律が勇ましく街中で響いていた様子を描写している。スメドレーはロンドンで客死したが、遺言に、「私はただひとつの忠節、ひとつの信念に生きてきました。それは、貧しく虐げられたものの解放でした。中国革命は、その骨組のひとつとして実現したのです。中国大使がロンドンに到着し、私の遺体にむかって『起て、奴隷となることを望まぬ人々よ。われらの血肉で築こう、あたらしい長城』という中華人民共和国の国歌を歌って下さるならば、これに越す感謝はありません」と記している。<sup>24)</sup>

次に日本でも広く知られた文化人、郭沫若の『抗日戦争回想録』をみる。本書は日中戦争初期、武漢で抗日宣伝活動の中核を担った彼が、国民党抗戦陣営の内幕を描いた興味深い回顧録である。一九三八年四月、戸外で開かれた歌謡大会で開会の挨拶に立った彼は、「歌謡の声は人々の感情、意志を打って一丸として行動に変える力を持っております。積

極的には、それは味方の力を団結させ、消極的には、敵の軍心を分散させます」と述べたことを紹介し、『義勇軍行進曲』などの音楽が抗戦を推進する上で、また敵軍を投降させる上で確かに功績があつたとして聶耳などの名を挙げ、彼らの業績を讃えている。<sup>(25)</sup>

日本人の著作では、前田哲男の『戦略爆撃の思想』がある。一九四〇年九月、周恩来が臨時首都重慶で時局解説の三時間半に及ぶ大演説を行うが、「短い休憩が入つたがそのとき聴衆の口から出たのは『義勇軍行進曲』の大合唱であつた」と、重慶の一角に、未来の国歌を歌う声が響いた様子を紹介している。

さらに東亜同文書院出身のコミュニスト、中西功『中国革命の嵐の中で』には、中西が天津で活動していた頃の話として「聶耳の歌が人々を勇気づけていました」という記述がある。<sup>(26)</sup>

これらからも聶耳の『義勇軍行進曲』が中国革命の中で大きな役割を果たしたことが理解されよう。

## 六、暫定国歌への選定

新中国が成立する三カ月半前の一九四九年六月十五日、新しい権力の協議機構である政治協商会議の準備会が発足した。翌十六日の晩、同会議常務委員会の第一回会議が開催され、新政府樹立に伴う準備作業の分担が一組から六組まで決められた。第六組が国旗、国章、国歌を検討する任にあつた。

七月四日に開かれた第六組の最初の会議は葉劍英が主宰し、国旗、国章、国歌を公募することを決定し、選考委員として、徐悲鴻、梁思成、艾青、馬思聰、呂驥、賀綠汀、姚錦新などに委嘱をおこなつた。そして七月十五日から二十一日までの間、『人民日報』、『北京解放報』、『新民報』、『大衆日報』、『光明日報』などに募集広告を掲載した。

締め切りの八月二十日までに、国歌について六百三十二点（歌詞、曲のみだけだと計六百九十四点）の応募があった。応募者は、政府の役人、高級軍人、著名な芸術家、詩人、著名学者や普通の軍人、労働者、農民、学生などさまざまな分野から、また全国各地から寄せられた。

あらかじめ選考にあたっての注意事項として、①中国の特徴、②政権の特徴、③新民主主義、④新中国の未来、⑤歌詞は話し言葉を使い、長すぎないこと、など具現すべき内容と表現について注意が示されていた。<sup>28</sup>寄せられた作品で、これはという歌詞や曲は印刷され、あるいは実際に演奏してみるなどして検討されたが、どれもみな理想とはかけ離れたものだった。

短期間に新たに国歌を製作することは不可能と思われる、それでは現在の革命歌曲の中から選んではどうかという考えが出された。それは、たとえば『延安頌』、『延水謡』、『救亡進行曲』、『太行山上』、『松花江上』、『畢業歌』、『漁光曲』、『大刀進行曲』などで、これらは確かにみな広く大衆に歌われていた。しかし、国歌としてどうかといえれば首を傾げざるを得ないものばかりだった。九月十七日に開かれた新政治協商会議準備会は、改めて再募集を行うことを建議した。毛沢東もこの問題に大いに関心を寄せていたようで、彼は九月二十五日晚、中南海の豊沢園に各界の名士二十数名を集め意見を聴取した。

この会議の席上、画家の徐悲鴻が正式に国歌が制定されるまで、『義勇軍行進曲』を暫定国歌にしようという提案をした。この提案は驚きをもって迎えられたというのが通説になっている。それはいかに中国の民衆に親しまれた歌であつても、映画の主題歌が国歌に、というためらいを誰もが感じていたからにちがいない。そうした消極論に対し、彼は「この歌は、抗日戦やその後の解放戦を通じて人々を奮い立たせ、理想の実現のために犠牲を厭わず敵と徹底的に闘う中国人民の気概を示している」と推薦根拠を強調した。周恩来が直ちにこの提案に賛成し、「この歌は、勇壮且つ豪快で、革命の気概があり、リズムも明快であり、演奏に適している」と評価した。

康有為に従い戊戌変法に参加した梁啓超の息子、建築家の梁思成が、「そう言えば自分がアメリカにいた時、街角で、アメリカの若者が口笛で『義勇軍行進曲』を吹いているのを聞いたことがある。この歌は世界的にも十分通用し歓迎される歌である」と述べた。

ただ歌詞の「中華民族に最大の危機せまる、一人びとりが最後の雄叫びをあげる時だ」という部分について異議が出た。「いまは戦争も終わり状況は変わっているではないか」と。これに対し周恩来が、「いま新中国は成立したばかりで、これからも戦争の可能性はあるし、平和な時でも危険に備えて準備を怠らないことが必要だ」と語った。

毛沢東が皆の意見をまとめ暫定国歌にする考えに同意した。経緯を整理した詳細な記録が六百余名の政治協商会議委員に配られ、同九月二十七日の政治協商会議第一回全体会議において全員一致で、『義勇軍行進曲』を暫定国歌にするこゝとが決定された。

## 七、文化大革命の嵐の中で

一九六六年から始まった文化大革命は中国社会に甚大な負の影響を残したが、田漢作詞、聶耳作曲の暫定国歌も大きな影響を受けた。この時期、国歌は歌われなくなってしまったが、それは作詞をした田漢が反革命分子として打倒されたことによる。田漢は、五、六〇年代、演劇改革の中での方針をめぐって康生や江青と対立し、批判を浴び、一九六六年十二月に逮捕され、二年後の六八年十二月十日獄死した。毛沢東夫人、江青は下積み時代の自分を知る者を次々に迫害したが、その家に下宿するなど世話になった田漢については特に疎ましく感じていたのだろう。

文化大革命の初期、暫定国歌『義勇軍行進曲』は、その曲のみが演奏された。しかし一九五九年に製作された聶耳の



伝記映画『聶耳<sup>32</sup>』に対し江青グループが、「田漢、夏衍らはこの映画を通じて聶耳を過大評価し、毛主席の役割を矮小化している」と言いがかりをつけた結果、『義勇軍行進曲』はすっかり影を潜め、陝西省の民謡であった『東方紅』が国歌の代りに使われるようになった。

一九七六年十月に江青らいわゆる四人組が打倒され、文化大革命は終息するが、『義勇軍行進曲』は依然曲のみが演奏されて歌詞は歌われなかった。一般民衆には元の歌詞の復活を要望する声も多かったが、まだ極左思想の影響が残っていた中央の指導者はそれを認めず、新しい国歌の制定を主張し、一九七七年、国歌募集小組が設けられた。

国歌募集小組では新しい国歌について、①曲は現行暫定国歌を使い歌詞のみ入れ替える、②まったく新しい国歌を創作する、の二案で募集活動を展開したところ、大量の応募作品が寄せられた。そのうち三百十八点が候補として残った。うち百三十点が『義勇軍行進曲』の曲はそのままに歌詞のみを変えるというものだった。新しい曲は百八十八点が寄せられた。これを審査する国歌選定組が組織され検討が進められることになり、ベテラン作家、音楽家が顧問として招聘された。候補作品を演奏し検討が加えられたが、結局、曲はそのまま、歌詞を変えることで党中央宣伝部、文化部（日本の文部科学省に相当）、さらには中央の指導者の意見を入れて決着した。一九七八年三月五日に開催された第五期全国人民代表大会第一回会議では、聶耳の曲はそのままにして田漢の歌詞を毛沢東を讃える集団創作による歌詞に変更することが採択された<sup>33</sup>。この時初めて、これまでの暫定国歌が正式に国歌となった。

その後、一九八二年三月、中国音楽家協会の常任理事会で、田漢の冤罪が晴れたことを踏まえ、歌詞の回復が図られるべきとの意見が出された。これが出席者の賛同を得て、常任理事会名義で全国人民代表大会に建議書が送られた。同年十二月四日、第五期全人代第五回会議で元どおりの歌詞にすることを可決した。実際に歌われなかった期間はともかく四年ぶりに元の歌詞に戻されたことになる。

七八年の集団創作による国歌については、一九七九年、建国三十周年に因んで中国郵政当局が切手を発行しており、

その歌詞を読み取ることが出来る。

(七八年国歌)

前進せよ！ 各民族の英雄的な人民よ

偉大なる共産党が我々のさらなる長征を導く

全ての民衆が心を合わせ共産主義の明日へ向かう

祖国を建設し、守るため雄々しく戦おう

進め！ 進め！ 進め！

我々は千年万年毛沢東の旗を掲げ進もう！

進め！ 進め！ 進め！

また、文化大革命初期に国歌の代わりに使用された「東方紅」の歌詞は次のとおりである。<sup>34</sup>

東の空が紅く染まり、太陽が昇った

中国に毛沢東が現れた

彼は人民の幸せをもたらしてくれた

ハイヤー（掛け声）

彼は人民の大きな救いの星だ

## 八、国歌の未来——終章

映画音楽として生まれた『義勇軍行進曲』が、少し誇張した言い方をすれば「歌で中国を変えた」といえるほどに中国革命の中で大きな役割を果たし、それゆえにこそ国歌に推挙されたことは以上から理解されると考える。誕生から六十八年、暫定国歌指定から五十四年、正式に指定されてから二十五年の歳月が過ぎた。文化大革命による一時的な国歌としての「機能停止」期間を除き、この歌はこれまで中国の「戦後」においても人々に親しまれ歌い継がれてきた。

先に『義勇軍行進曲』と『ラ・マルセイエーズ』の類似性について触れたが、次に歌詞がいまの時代に合っているのかどうか、違和感がないのかという点を考えてみたい。これについて『ラ・マルセイエーズ』は試練に遭遇したことがある。『ラ・マルセイエーズ』作曲二百年にあたる一九九二年、フランスのアルペールビルで行われた冬季オリンピックの開幕式がきっかけとなって、歌詞改革論争が再熱した。十歳の女の子が伴奏なしに歌った『ラ・マルセイエーズ』のリフレインは、「武器を取れ、市民諸君！（中略）不浄なる血が、我らの田畑に吸われんことを」という戦闘的なものであり、スポーツによる国際親善の場で、しかもテレビ中継を通じて全世界に放映されたことにショックを受けたフランス人は少なくなかったという。

かつてはともかく現代においては隣国を敵とみなす歌詞は適当でないという論議は、これ以前、一九八九年の革命二百周年の際にもあった。国歌に求められているという国家の独立性や愛国心は、他国を問題にせずとも歌えるはずということである。中国国歌の今後を考える上でひとつの示唆を与えるものといえるだろう。

二〇〇〇年十二月、わが国の近隣で国歌の歌詞を変えた国がある。ロシアだ。スターリン時代の一九四三年に作られたアレクサンドロフ作曲の国歌をロシア連邦の正式国歌として採用した。歌詞は旧ソ連国歌を作詞したミハルコフの改

作版でほぼ全編が書き直された。以前の共産党賛美の歌詞が、「ロシアは神聖なるわが大国、ロシアは愛すべきわれらの国」とロシアの連呼で始まる歌い出しをはじめ、国威発揚を促し、ロシアの栄光を讃える表現となった。これまではソ連崩壊後、エリツィン政権がグリーンカ作曲の『愛国歌』を国歌として大統領令で決めていた。しかし歌詞もなく、国民の間からは旧ソ連国歌の復活を望む声が根強かった。

やはり国民に親しまれなくては国歌としての存在意義は危ういものとなろう。その意味では、曲はもちろん、歌詞も人々の心に響かなければならない。歌詞が歌う人の心に響くかどうか、これは大切なことである。『義勇軍行進曲』の歌詞に中国の人々がいつかは違和感を覚えるようになるのだろうか。

一九九六年十二月十六日に開催された中国文学芸術界联合会（文聯）第六次全国代表大会で、江泽民国家主席は、「中华民族は、屈原、李白、杜甫、閔漢卿、曹雪芹という世界的な文化人を生んだ民族であり、偉大な文学者、思想家、革命家魯迅を生んだ民族である」と述べ、続けて「郭沫若、茅盾、聶耳、冼星海、梅蘭芳、翦白石、徐悲鴻などの現代の大文学者、芸術家を生んだ民族である」として、芸術家として円熟の境に達した後には亡くなった人たちと共に聶耳の名を挙げて<sup>35</sup>いる。

しかし二〇〇一年十二月十八日に開催された同じ文聯第七次大会では、江泽民主席（当時）は、聶耳のみならず固有名詞をあげて先人たちの功績を讃えることはしていない。代わってこの頃から盛んに言われるようになってきた「三つの代表」理論を文芸の仕事に携わる者は生かせと訴えている<sup>36</sup>。

「三つの代表」とは、中国共産党は、「①先進的な生産力の発展の要請、②先進的な文化の前進方向、③最も広範な人民の根本的利益——を代表するものである」ということである。③が私営企業主の入党容認を意味し、中国共産党が広範な国民が入党可能な国民政党に衣替えをするのではないかという見る向きがある。そうであるとしたら②の「先進的な文化の前進方向」についても新しい解釈がなされ、いわゆる「革命色」は薄れていっても構わないということである

うか。いま「三つの代表」理論が唱えられる時代に、『義勇軍行進曲』は、あるいはこの歌詞は引き続き存続し得るのだろうか。

筆者は以上において中国国歌、『義勇軍行進曲』がどのような時代背景をもとに誕生したのか。なぜに「過激な」歌詞をもっているのかを示してきたが、二十一世紀を迎え世界情勢が大きく変化する中で、この国歌もいずれ近い将来検討が加えられるであろうと考える。

そして最後に付言すれば、いまなおこの歌が中国の人々に愛され歌い継がれている現実に対し、我々日本人は改めて国歌とは何か、どのような役割を果たすのかを一般論ではなく、自国の歴史をふまえて考えてみるべきだと思う。

### 注及び引用

- (1) 一八九八—一九六八年 詩人、劇作家、日本の高等師範学校（現筑波大学）に学ぶ。中国演劇運動の指導者として活躍。
- (2) 一九二—一九三五年 作曲家。拙稿「聶耳—中国国歌作曲者と日本」、『東北公益文科大学総合研究論集』第五号 二〇〇三年 一六九—一九三頁 及び拙著『神奈川の中の中国』東方書店 一九九八年 七—一五頁参照
- (3) 東京堂出版 一九九三年 七七頁
- (4) 情報センター出版局 二〇〇〇年 四五頁
- (5) 共同音楽出版社 一九七七年 六六—六七頁
- (6) 美山書房 一九八六年 九八—一〇一頁
- (7) 岩崎書店 一九七六年 三五〇頁
- (8) 前出(3) 六二頁
- (9) 丁嶋「紀念聶耳 学習聶耳 振興中華 造福人民—聶耳生誕七十周年大会における講話」『音楽生活』一九八二年 三三三頁
- (10) 吉田進『ラ・マルセイエーズ物語』中央公論社 一九九四年 二二—九九頁
- (11) 一九一〇年生まれ 詩人。早稲田大学に留学、日本文学研究会会長など

- (12) 『人民日報』一九六〇年七月十七日―聶耳の墓のほとり―聶耳同志逝去二十五周年を記念する
- (13) 銭仁康『世界国歌博覧』北方文芸出版社 一九九八年 一五頁
- (14) 榎本泰子『楽人の都上海』研文出版 一九九八年 一二四頁
- (15) 『歌声中的二十世紀―歌声中国歌曲精選』(中国国際広播出版社 一九九九年 六四頁) の中でもこの説が採られている。
- (16) 田漢『風雲児女和義勇軍進行曲』『大衆電影』一九五七年 一九号 二六頁、夏衍『永生的海燕』『人民日報』一九五五年七月一日、郭超『国歌歷程』中国国際広播出版社 二〇〇二年 七二―七三頁
- (17) 張駿祥・程季華主編『中国電影大辞典』上海辞書出版社 一九九五年 二五七頁、程季華主編『中国電影發展史』中国電影出版社 第一卷 三八五―三八六頁ほか
- (18) 許幸之『憶聶耳』『人民日報』一九八二年二月十五日
- (19) 「回憶三〇年代的聶耳」『上海歌声』一九八二年 一八頁
- (20) 『中国大百科全書』中国大百科全書出版社 一九八九年 三三八頁
- (21) 米国に留学した作曲家、西洋の作曲理論を紹介し若い人たちを育てた。
- (22) 前出(16) 郭超『国歌歷程』二四頁
- (23) アグネス・スメドレー『中国の歌ごえ』みすず書房 一九七二年 一三頁、三三頁
- (24) 高杉一郎『大地の娘』岩波書店 一九八八年 二九二頁
- (25) 郭沫若著 岡崎俊夫訳『抗日戦争回想録』中央公論社 中公文庫BB110二十世紀 二〇〇一年 七二頁
- (26) 前田哲男『戦略爆撃の思想』朝日新聞社 一九八八年 二九〇頁
- (27) 青木書店 一九七四年 一二五頁
- (28) 国歌決定の経過については引用を除いては前出(16) 『国歌歷程』、前出(13) 『世界国歌博覧』、崎松『聶耳與玉溪』民族出版社 一九九九年を参照しまとめた。
- (29) 前出(28) 『聶耳與玉溪』二三頁
- (30) 前出(28) 『聶耳與玉溪』二三頁
- (31) 一九五九年海燕電影製作所制作。監督は鄭君里。聶耳役を友人だった趙丹が演じた。
- (32) 楊克林編著 樋口裕子・望月暢子訳『中国文化大革命博物館』(下) 柏書房 一九九九年 三三六頁
- (33) この間の経過については前出(16) 『国歌歷程』九―一〇頁

- (34) 前出(15)『歌声中的二十世紀—百年中国歌曲精選』一六八頁  
 (35) 『人民日報』一九九六年十二月十七日  
 (36) 『人民日報』二〇〇一年十二月十九日

本文で引用した書籍のほか下記の著書・事典を参考にさせていただいた。

- ① ジャン・ミシエル・フルドン著 野崎敏訳『映画と国民国歌』岩波書店 二〇〇二年  
 ② 岩崎富久男「一九三〇年代の『抗日救亡』文化」『明治大人文学研究所紀要 第四四冊』一九九九年  
 ③ 榎本泰子「中国国歌を知っていますか」雑誌『未来』未来社 一九九九年九月号  
 ④ 小谷一郎・佐治俊彦・丸山昇編『転形期における中国の知識人』汲古書院 一九九九年  
 ⑤ 辻康吾監訳『文化大革命十年史』(下) 岩波書店 一九九六年  
 ⑥ 王素萍『她還沒叫江青的時候』北京十月文芸出版社 一九九三年  
 ⑦ 李子雲他編選『夏衍談電影』中国電影出版社 一九九三年  
 ⑧ 陳一萍編『中国早期電影歌曲精選』中国電影出版社 二〇〇〇年  
 ⑨ 陳播主編『中国左翼電影運動』中国電影出版社 一九九三年  
 ⑩ 王懿之『聶耳傳』上海音楽出版社 一九九二年  
 ⑪ 向廷生「中華人民共和国国歌作曲者—作曲家聶耳」『中国近现代音楽家傳』第二卷所収 春風文芸出版社 一九九四年  
 ⑫ 聶耳全集編集委員会編『聶耳全集』文化芸術出版社・人民音楽出版社 一九八五年  
 ⑬ 玉溪市芸術創作研究所聶耳研究室『聶耳音楽作品集』遠方出版社 二〇〇〇年  
 ⑭ 鄒平『田漢—中国話劇的奠基人』上海教育出版社 一九九九年

日本人、中国人、生存者、故人をとわず敬称は略させていただいた。また中国図書からの引用は拙訳による。

# 中华人民共和国国歌

(义勇军进行曲)

田汉作词

聂耳作曲

进行曲速度

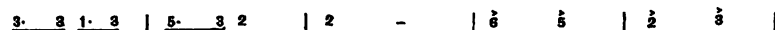


(前奏)

起



来! 不愿做奴隶的人们! 把我们的血肉,



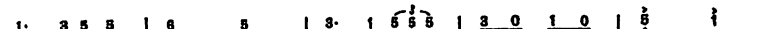
筑成我们新的长城! 中华民族



到了最危险的时候, 每个人被迫着发出



最后的吼声。 起来! 起来! 起来!



我们万众一心, 冒着敌人的炮火前进!



冒着敌人的炮火前进! 前进! 前进! 进!

『人民日报』1998年1月2日